

を元気に

先月、羽田空港が32年ぶりに「国際化」した。秋空の下、各国からの便が発着し、多くの人々でにぎわう。だが目を外に転じると、日本は東アジア、さらには世界の流れから遅れてしまったようだ。再上昇の空路を探る。

心を鬼にし、せめて2番手に

この取材のテーマは「日本の空を元気に」ですが、日本は空も航空産業も、いつのまにかアジアに負けているんで

航空の問題をお話しするのは初めてです。担当していた時は、言いたくても言いにくいことがたくさんあって。昨年、鳩山内閣の国土交通副大臣になりました。航空や空港全般を担当してわかったのは、これは日本の政治の縮図だということ。JALも地方空港も空港整備勘定も、しがらみ、もたれあい、タブーの山です。問題が噴出していったのに、歴代の政府はずっと先送りしてきたんですね。

辻元 清美さん



60年生まれ。衆院国土交通委員会筆頭理事。96年初当選。社民党を離党し現在は無所属。会派は民主党・無所属クラブ。当選4回。＝高波淳撮影

元国土交通副大臣・衆議院議員

す。ガラパゴス化しつつあると思いました。過去の栄光にすぎりついたり、見ないふりしたりしてきた結果です。アジアの玄関になるという「アジア・ゲートウェイ構

想」は今後も目指すべきです。でも、日本はアジアの東の端にあって地理的に不利なうえ、着陸料が高すぎる。このままでは日本の空港を敬遠する傾向がさらに強まるでしょう。グローバルな競争の場に残るのは厳しいという危機感を、政治も持つべきです。

いまは、アジアで3番手か4番手です。政治主導で、競争条件をライバル国とそろえて、トップは難しくてもせめて2番手まで引き上げる努力をすべきだと思います。羽田空港が国際化に向けて進んだのは大きな一歩です。発着回数44・7万回になり

ますが、いずれ足りなくなりますが、成田空港では滑走路は増やせない。日本の競争力強化のため、羽田の沖合に滑走路をもう一本つくるかどうか。政治が決断するときに早晩来るでしょう。

韓国の航空会社は日本の各地に直接乗り入れて、仁川空港経由の海外旅行の営業をかけています。すごいですよ。地方都市に来て、地元の旅行会社に「仁川空港経由のヨーロッパ旅行を売って下さい。成田経由よりこれだけ安くあります」と。この面でも日本は後れをとっているのは。これからはアジアの地方

都市にも行って、日本の空港を使ってください、と営業をかけないといけません。望みもあります。先日、ある空港関係者と話をしたんですが、近くに医療施設をつくって、温泉も出そうなので保養地と空港を一体化して、それをまちづくりをしよう、雇用を生もう、と構想しているんです。空港とメディアカルツーリズムの融合ですね。

航空政策というのは、空港がどう、航空会社がどう、「空の自由化」を進めるオープンスカイがどう、というだけじゃない。観光や文化やスポーツと一緒に考えること。

例えば「国際機関を持つてられたらすばらしい」とか、そういうトータルパッケージ、総合的な処方箋を考え、やっていくものですね。政治家は心を鬼にすることも大事です。これまで、どの地域も「空港も、新幹線も、高速道路も」と言ってきた。でもそれでは共倒れになる。「あれもこれも」じゃなくて、「あれかこれか」に絞らざるを得なくなった。厳しくても、それが回り回って、結局は日本を元気にすることになると思います。

聞き手 編集委員・刀祢館正明



カラーシュ・寺島 隆介 / The Asahi Shimbun